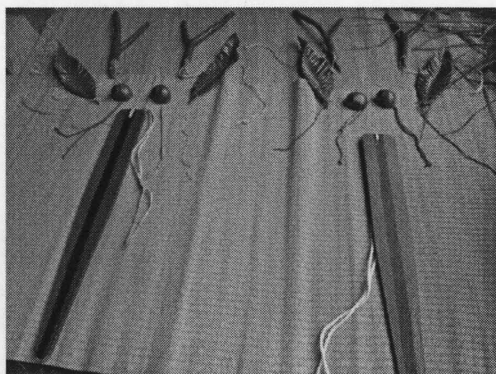




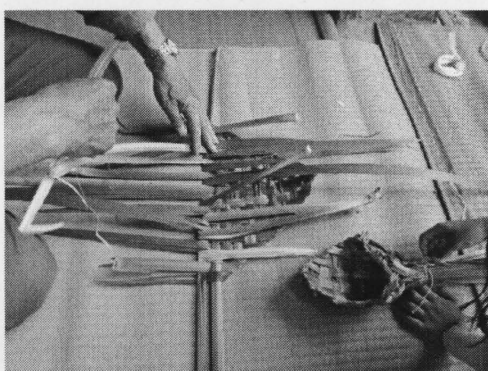
(写真2-25) 茅を整理する



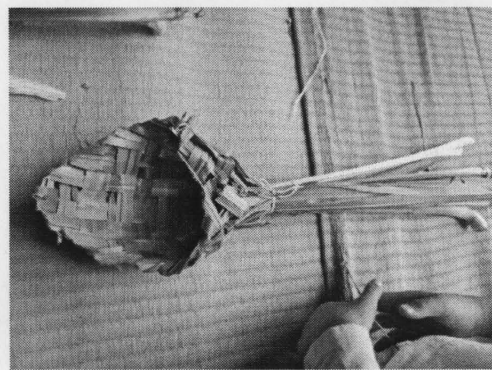
(写真2-26) 「蛇も蚊も」の目玉、耳、角、尾



(写真2-27) 「蛇も蚊も」の舌製作用の菖蒲



(写真2-28) 「蛇も蚊も」の舌を製作中



(写真2-29) 出来上がった「蛇も蚊も」の舌



(写真2-30) 「蛇も蚊も」の胴の完成写真



(写真2-31) 「蛇も蚊も」の尾



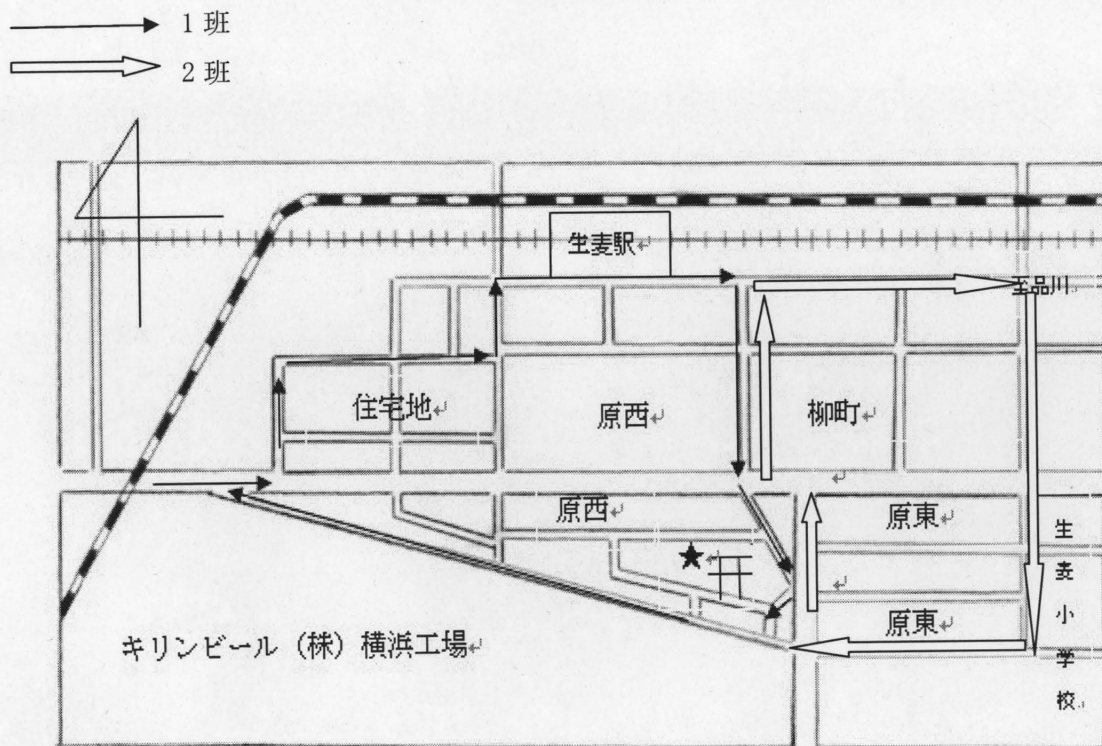
(写真2-32) 巡行

②巡行順路

午後1時に「蛇も蚊も」の巡行が始まる。最初に、神明神社で「蛇も蚊も」を担いで社殿を中心とし3周回してから、鳥居を出て巡行する。巡行のチームは1班と2班2つに分かれる。1班は原西町、住宅地町を回し、2班が原東町、柳町を巡行する。2つ班はそれぞれの地区を回し終わったら、神明神社の鳥居に待ち合わせ、神明神社本殿の前に2頭の「蛇も蚊も」を翌日まで置く。2つの班の巡行路線は以下の図に示すようになる(図2-1)。

(図2-1) 神明神社「蛇も蚊も祭り」巡行図

(提供者:「生麦蛇も蚊も保存会」会長 青木氏)



2) 道念稲荷神社「蛇も蚊も祭り」の構造

祭りの当日に、道念稲荷神社へ行く主な道に、「蛇も蚊も祭り」の横断幕が何箇所か張られている。道念稲荷神社へ近づくと、祭りの雰囲気は強くなる。

道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」は6月の第1日曜日午前8時に始まる。まず、町会長が挨拶して、祭りの開催を宣いする。続いて、杉山神社の宮司2人は、「蛇も蚊も祭り」の参加者に神事を行う。祭りの前週に編み終わった3頭の「蛇」は、神社本殿の前に置かれて、その前に供え物が並ぶ。宮司は供え物に向かって3頭の「蛇」に祓いを行ってから、参加者全員に祓いをする。その後宮司は玉串を捧げ、蛇に御神酒を飲ませ、塩で清めてから神社の鳥居を出発する。神事はほぼ20分で終わる。神事に続き、司会を務める町会長が祭りを見に来た鶴見区役所と生麦小学校の役員たちを参加者に紹介する。最後に、保存会会長をはじめ、各町会役員が参加者に挨拶をする。その後に、祭りが始

まる。

東部本宮と西部本宮の氏子が「蛇」を担ぎ鳥居から出発する。生麦囃子会は軽トラックで囃子を演奏しながら、「蛇」の後ろについていく。そして、氏子は三つの方向に分けて巡行する。南行する「蛇」は先に鳥居をくぐって出発する。続いて、西行、北行が同じく鳥居から出発する。神主と宮司が先導し、その後4から5名の役員が後についていく。「蛇」の頭の部分を大柄な子供と大人が担ぎ、胴体を20名以上の子供が担ぐ。所々で子供会の大人や町会役員が付き添う。かつては「蛇」の担ぎ手が必ず男性であったと聞いたが、近年参加者の人数不足のため、子供の母親あるいは専業主婦も担ぎ手になった。

氏子らは「蛇」を担ぎ、「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」と大声で唱えながら町中を練り歩き、一軒一軒の玄關口に「蛇」の頭を入れ「わっしょい わっしょい」と掛け声で囃し立てる。神主と宮司は先頭で道を祓い、後ろに保存会の氏子が、各家一軒一軒のドアを叩き、人がいるかどうか、また「蛇」を玄關に入れてほしいかどうかを確認する。巡行に回される住民のほとんどは家で「蛇」が来るのを待っている。時々「蛇」の巡行に間に合わなかったのもので、巡行の最後に再び回って来てほしいと氏子にお願いする住民もいる。また、「蛇」が来る前に、すでにドアを開けて「蛇」が入りやすいように玄關をきれいに掃除して、家の前に待つ人も少なくない。地域の祭祀行事を重視する住民の気持ちが表れているようである。

「蛇」を玄關まで入れてほしい住民が多数を占めているが、その年に葬式を行ったので祭りを避ける家もある。また、別の個人的理由で入ってほしくない家も何軒かある。町内の巡行はほぼ2時間で終わる。その後、氏子たちは生麦小学校の入り口で待ち合わせする。保存会の会長と生麦小学校の校長が先にあいさつをする。その後、参加者の全員が生麦小学校の校庭に入る。次に、3頭の「蛇」が絡む場面になる。差配の笛太鼓の合図で3頭が中央に突き進み、頭を高く上げ絡み争う。絡み合っている「蛇」に水がかけられる。水をかけられ囃し立てられると、大人も子供も揉み合いとなる。尾の方は頭の絡み具合で大きく振り回される。ケガ防止のため早々に制止する。

このように、「蛇」の絡みを3回以上行う。絡みの最後に「蛇」を担ぐ人と周りで見ている人はみんなビショ濡れになる。「蛇」の絡みは「蛇も蚊も祭り」が最も勇壮な場面であり、祭りのクライマックスである。最後に、氏子は3頭の「蛇」を担いで学校を出て神社に戻る。町の境のところでまた神主と宮司が神事を行う。神事では「蛇」が1頭ずつトグロを巻き、「蛇」の頭を本宮の方に向け並べ、氏子は「蛇」の後ろに並ぶ。神主と宮司は3頭の「蛇」に祓いをしてから、参加者全員で3本締めを行い祭りの終了を祝う。

町の境から本宮道念稻荷神社に帰る途中で、囃子保存会は軽トラックに乗って囃し立てる。その後、囃子保存会の踊り手は舞いながら進む。祭りの氏子は「蛇」を担ぎ「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」と唱えながら本宮道念稻荷神社に帰る。

道念稻荷神社に戻ると、「蛇」を社殿の前にトグロを巻いて置く。そこで1頭の「蛇」

を解体し、頭を燃やす。焚き上げている間、獅子舞、囃子が行われる。儀礼に参加した小学生にお駄賃と柏餅が配られる。「蛇」の焚き上げが続いている間に、世話役により祭礼の後片付けと、直会の準備が行われる。

残りの「蛇」は処分されるが、他の2頭の「蛇」は生麦地区センターの資料館あるいは博物館に展示される。2013年には「蛇も蚊も祭り」で使っていた「蛇」が生麦地区センターで展示された。また、「蛇も蚊も祭り」を舞台に出演させたいとの依頼された際には、氏子は祭りで使った「蛇」を手直し、あるいは新たに舞台用に「蛇」を作る。

このように、道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」は、毎年地域の無病息災を守って続けられている。



(写真2-33) 祭りの横断幕



(写真 2-34) 神事



(写真2-35) 「蛇」を民家に担ぐ



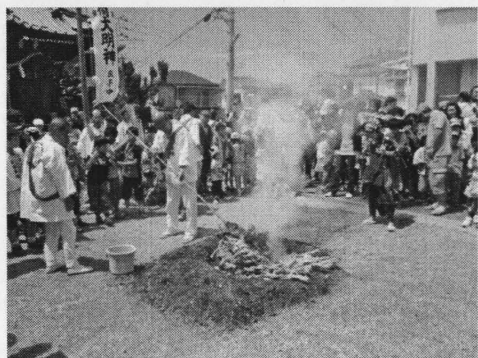
(写真2-36) 小学校で「蛇」を絡み合う



(写真2-37) 「蛇」に神事をする



(写真2-38) 囃子舞



(写真 2-39) 「蛇」を燃やす



(写真2-40) 獅子舞

第4節 現在の「蛇も蚊も祭り」の「目に見える」変化

「蛇も蚊も祭り」は300年余りの歴史を持つ疫病退散儀礼であり、主催地生麦地区の誇れる民俗文化である。特に、平成4(1992)年に「蛇も蚊も祭り」が横浜市の無形民俗文化財に指定されてから、さらに地域の人々に重要に視されるようになった。横浜市は無形民俗文化財として「蛇も蚊も祭り」に補助金を出し、またニュース・新聞・インターネット上でも「蛇も蚊も祭り」の宣伝が多くなった。現在、「蛇も蚊も祭り」は歴史と民俗文化に興味を持っている人たちの取材の対象になり、横浜市の無形民俗文化財として民俗文化の一翼を担っている。一方、元々地域の疫病を退散するとの意図で行われた「蛇も蚊も祭り」が、長い年月を経て、どのような変化を生じたのか。また、一見「外部」の目線から見るとにぎやかな祭りに見えるが、現在の伝承者は祭りをどのように捉えているのか。これらの疑問をもって、以下の分析を展開したい。

(1) 祭祀組織の変化

現在の「蛇も蚊も祭り」は「生麦蛇も蚊も保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の2つの保存会により催される。筆者の現地住民からの聞き取り調査によれば、この2つの保存会はともに「蛇も蚊も祭り」が横浜市の無形民俗文化財に指定された90年代ごろに発足したとのことである。300年余りの歴史を持つ祭りに対して、これらの保存会の成立は決して早いとはいえない。では、この2つの保存会はどのようなきっかけで発足したのか、また保存会がない時代にはどの組織が祭りを主催していたのか。この節では以上の疑問を解決したい。

まず、保存会の発足について、筆者は2つの保存会の会長に聞き取り調査を行った。「生麦蛇も蚊も保存会」の会長は青木氏であり、会社を定年退職してから保存会に参加して現在会長の職に就いている。青木氏の話によると、「生麦蛇も蚊も保存会」は1990年になって発足させようという気運が町内会の中で高まった。90年代に入って、「蛇も蚊も祭り」を横浜市指定無形民俗文化財に登録するために、横浜市教育委員会ははじめ生麦の町内会に至るまでたく氏の人々が尽力した。その1つが「蛇も蚊も保存会」を発足させることであった。青木氏は90年代になり、当時まで町内会で「蛇も蚊も祭り」の世話をしていた父親に代わって、「生麦蛇も蚊も保存会」を設立し会長を務めた。

一方、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」も同じく、横浜市の無形民俗文化財に指定された90年代に発足した。横浜市から補助金をもらうには保存団体が必要となるので、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」を発足させた。つまり、保存会は無形民俗文化財に指定されてから発足した組織である。

では、保存会が成立する前には、どのような祭祀機関が「蛇も蚊も祭り」を主催していたのだろうか。これについては、「蛇も蚊も祭り」に70年以上に亘って参加し続けている田中氏への聞き取り調査を通して述べてい。

「蛇も蚊も祭り」は江戸時代中期から始まったといわれるが、残念ながら現時点では最初の歴史的な記録は見つからない。そのため、「蛇も蚊も祭り」の最初の形式は現在

の氏子に対する聞き取り調査によって推測するしか方法はない。筆者は2012、2013、2014年度の「蛇も蚊も祭り」に参加し、この3年間で「蛇も蚊も祭り」の主催者と参加者のうちの何人かに聞き取り調査をした。その中で、一番ご年配なのが田中氏である。田中氏は昭和5(1930)年に生麦で生まれ(当時の生麦村)、昭和45(1970)年までに生麦で漁師として日々の生活を送っていた。しかし、京浜工業地帯に位置する生麦の埋め立て作業の進行に伴って、生麦の漁業は大きな影響を受けた。明治中期から昭和初期にかけて京浜工業地帯の発展の影響を受け、生麦の重要な産業であるノリの生産は次第に衰退した。その影響は田中氏の生活にも及び、田中氏は昭和45(1970)年に横浜の会社に入って普通のサラリーマンになった。

田中氏の家族は11人いる大家族であった。そのうち田中氏は5番目の息子で、下に3人の妹と1人の弟がいる。田中氏の父親は生麦本宮町の役員であったため、「蛇も蚊も祭り」の保存会を発足する前から毎年祭りの準備段階から参加していた。それ故、田中氏は子供のころから毎年父親と一緒に茅の準備から祭りの最後まで参加した。また、「蛇」の作り方も父親から教えてもらった。当時の日本は結婚しても両親と一緒に住むのが当たり前の時代であり、祭りにも家族単位で参加することが多かった。田中氏は「子供の時に、「蛇も蚊も祭り」の日になると、本宮全員の子供たちは必ず父親たちと一緒に「蛇」の製作に手伝ったり祭りを遊んだりしたものです」と語ってくれた。しかし、昭和30年代以後、田中氏の一番上の兄が結婚して家を出て以後、田中氏のほかの兄弟もみな結婚して生麦の実家から出ていき、田中氏だけが実家に残りそのまま住むことになったため、家族の中では田中氏だけが現在まで毎年「蛇も蚊も祭り」に参加しているということになる。

田中氏が子供の時の昭和初期のころに、家族一緒に住むのが一般的であり、祭のハレの日には家族単位で参加することがほとんどであった。当時の町内会は祭祀の組織機関でもあったため、町内会の役員たちの家族を含めて住民全員が参加するのは当たり前のことであった。当時は祭りの開催日がすでに日曜日になっていたため、小学生たちも積極的に参加した。また、漁師たちは1日漁を休んで地域1年間の疫病退散のため、家族を連れて祭りに参加していた。

田中氏の事例を見ても、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」が発足する前には、本宮町内会が組織機関の役割を果たし、地域の住民が家族単位で毎年「蛇も蚊も祭り」に参加していたことが分かる。

90年代に保存会が発足する前は、「蛇も蚊も祭り」は、住民に代々受け継がれ、また町内会で継承されていた。大正10(1921)年4月1日、生見尾村は町制が敷かれ鶴見町と改称した。大字としては、旧村名がそのまま引き継がれ、生麦村は大字生麦となった(鶴見区史刊行委員会 1982)。昭和2(1927)年4月に、鶴見町は横浜市に編入され、同年10月に区制実施により鶴見区になって、生麦町は鶴見区に所属するようになった。生麦町になると同時に、生麦町内会が発足した。町内会は定期的に祭礼を行う重要な組織となった。

「生麦蛇も蚊も保存会」の発足によって、祭祀儀礼を実施する組織が、町内会から保

存会へ変わった。1990年代に「生麦本宮蛇も蚊も保存会」と「生麦蛇も蚊も保存会」が発足した。当時の保存会のメンバーのほとんどは、本宮町内会の役員と、町内の地元出身の住民及び毎年「蛇も蚊も祭り」に参加する人たちであった。田中氏は本宮の出身であるため、「本宮生麦蛇も蚊も保存会」に参加した。田中氏は当時の保存会の中で「蛇も蚊も祭り」に参加した年数が一番多くて「蛇」の作り方が詳しかったため、「蛇」製作の監督を担当した。毎年1回だけの行事なので、参加者は「蛇」の編み方を覚えることができないと語っていた。毎年、「蛇」の編み方を統一させるため、田中氏は必ず現場で「蛇」を編む作業を指導する。田中氏は父親から教えてもらった「蛇」の編み方を今の保存会の役員たちに教えて、祭りで最も重要だといえる「蛇」を保存するように努めている。

保存会が発足すると同時に、「蛇も蚊も祭り」の横浜市指定無形民俗文化財へ登録申請が始まった。保存会と横浜市教育委員会の努力で、平成4(1992)年に「生麦蛇も蚊も保存会」と「生麦本宮蛇も蚊も保存会」が主催する「蛇も蚊も祭り」は、2つの保存会で同時に横浜市指定無形民俗文化財に登録された。

「生麦蛇も蚊も保存会」は、「蛇も蚊も祭り」を維持管理し伝承していくことを目的とする集団である。保存会の役員は会長1名、副会長2名、会計1名、監事1名で構成される。そのなかで、会長は委員の互選により選出され、その他の役員は会長が指名する。役員の任期は2年とし、再任を妨げない。昭和52(1977)年6月に保存会の名簿が作られ、昭和53(1978)年3月31日より保存会規約が施行されている。保存会は原西自治会、原東町内会、柳町町会、住宅地町内会、生麦住宅自治会の氏子住民で構成し、選出された委員を以って委員会を構成し運営している。「生麦蛇も蚊も保存会規約」によって会長は保存会委員の互選によって選出されるが、実際には代々の会長は、前の会長に指定されて選ばれてきた。保存会は、茅刈場の選定、茅の成長状況の確認、茅の道路使用許可申請、火爆発生届の届出、巡行路線の確認の準備活動を行う。「蛇も蚊も祭り」の期間に、材料の調達、「蛇」作製、巡行、焼却等の役割を担当する。

一方、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」は、会長1名、副会長2名、会計1名、世話人20名以内と監査2名の組み合わせになっている。会計・世話人・監査が保存会会長・副会長が選任し保存会の役員は、本宮両町会により推薦され、会長・副会長の両名の合意で決められる。保存会会長は保存会の代表で、副会長が会長を補佐し、会長が事故などでその職務を遂行できない時に、その職務を代行する。会計は会計業務を担当し、世話人は祭礼行事を分担して執行し、監査が財務の執行を監査する。役員の任期は2年とするが、補欠役員の任期を前任者の残任期間とし、再任することができる。実質的には再任を繰り返すため無期といえる。

保存会は、生麦本宮地区に継承されてきた「蛇も蚊も祭り」の伝統を守り、後世への伝承と併せて、活動を通して生き生きと豊かで潤いある地域社会にすることを目的とする。保存会は主に「蛇も蚊も祭り」を主催するほかに、杉山神社元旦祭、節分祭、例大祭、道念稲荷神社正五九祭、道念稲荷神社年越し行事、町内獅子舞にも参加する。保存会の会計年度は、毎年4月1日に始まり翌年3月31日に終わる。保存会の経費は、奉納

金、横浜市文化財管理奨励金、協賛金、研修会費、預金利息に充てる。

平成4(1992)年、横浜市指定無形民俗文化財に登録されてから、横浜市教育委員会事務局生涯学習文化財課は、毎年保存会に文化財管理奨励金を交付している。その奨励金は、神社の看守・清掃及び防護等の軽微な補修など、文化財の通常の維持管理にかかわる経費に充てられる。平成15(2003)年以前には、管理奨励金が毎年15万円で、以後、7万5千円となっている。

「蛇も蚊も祭り」のほかに、保存会の役員は杉山神社の奉賛会に所属しており、元旦祭(1月1日)、節分祭(2月)、盆踊(8月5日、6日)と例大祭(8月)の祭祀活動に参加する。原地区の「蛇も蚊も祭り」は保存会が主催者になる一方、地区の老人会、婦人会、子供会が祭りへ協力する組織である。老人会のメンバーは「蛇も蚊も祭り」に参加する年数が多く、「蛇」を編むのに詳しい人が多いため、祭りの当日に「蛇」を編む作業を担当する。婦人会は普段、地区のイベントの料理の用意を担当するため、「蛇も蚊も祭り」の参加者のお弁当、お菓子、及び祭りの直会の準備を担当する。子供会は、年齢層が低い子供たちが中心となるので、祭り当日に「蛇」を巡行するチームに入れられ、「蛇」の尾の部分を担当することになっている。地区の老人会、婦人会、子供会は祭りのそれぞれの部分を担当し、祭りが順調に行われることに必要な力を提供している。

以上、「蛇も蚊も祭り」の組織機関が町内会から保存会に変化する過程を見てきた。保存会は祭礼を挙行・伝承することが主な役割であるが、地域とは緊密な関係を持つ組織のため、地域と関連するイベントにも参加する。保存会のメンバーは町内会の役員を担当する人が多く、それと同時に地域の老人会などの組織に参加する場合もある。保存会を発足させるきっかけは無形民俗文化財に指定されることを目指したことがあったが、単にそのために新たな組織を作ったわけではなく、保存会のメンバーから見ると主に祭に熱心が人が保存会の役員を担当し、彼らがそもそもの祭りの主催者であったともいえる。この面から見ると、保存会は祭りの発展に従って形成された組織である。一見、祭礼の組織機関は家族間での伝承から町内会に変化し、また町内会から保存会に変化したように見えるが、実際にはどの組織も地域伝統の民俗文化に熱情を持っている住民の人々が作った組織という点では同じではないだろうか。

(2) 構造の変化

祭礼の構造的側面には、現代社会において多く変化した。昭和初期のころ、生麦は半農半漁の村で、町内の通りにはたく氏の井戸があった。「蛇も蚊も祭り」の日に、「蛇」を担いで町内を巡行して、井戸に着いたら、井戸から水を出して「蛇」とそれを担ぐ氏子たちに水かけをすることがあった。井戸の水がなくなるに従って、現在では生麦小学校で3頭の「蛇」が絡む際に水かけをするという形に変化した。

また、昭和30年代以前には生麦駅の後ろの山に自生している茅を刈っていたが、住宅地が増えるに従って、山の茅が少なくなった。生麦近くの浜が埋め立て地になってからは、大黒町に茅が生えているのを見つけたので、大黒町の茅を利用するようになった。

昭和20(1945)年以前には道念稲荷神社は2頭の「蛇」を作っていた。大正時代には、

本宮と本原が1つの町会であり、雄と雌1頭ずつの「蛇」を作っていた。また、この2頭の「蛇」を村の境にトグロを巻くように置き、祭りを行っていた。その後「蛇」を担ぐことになった。当時は家が密接しておらず敷地に余裕があったため、「蛇」を担ぐ時に、バックせずに済んでいた。祭礼が終わると、漁船に「蛇」を乗せて東京湾の中央まで行って、「蛇」を海に流していた。しかし、海風によって岸边に吹き寄せられるのが不吉と思われたため、神社で燃やすことになった。だが、燃やす際の煙があまりにも多いと消防団に指摘されたため、1頭の「蛇」の頭だけを燃やすことになった。

また、祭りの中で唱える「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」、現在までそのまま変わらず祭礼の中で使われており、この文の口調から見ると、男性い葉だと考えられる。そのため元来の「蛇も蚊も祭り」は、男性だけが参加していた祭りではないかと推測する。

「蛇も蚊も祭り」の起源地である道念稲荷神社では、毎年端午の節句の日に祭礼を行っていた。正確な時期は定かではないが、少なくとも戦後からは神明神社と道念稲荷神社は別々に行うようになった。その後、祭礼の日には元々の端午の節句から6月6日に変更になり、さらに戦後からは現在の6月第1日曜日になった。祭礼を行う場所と日にちの変更は地域が現代化に進むに従ってやむを得ず起こった変化と見なすことができる。

そのほか、かつて祭礼の巡行は、住民に大いに歓迎され、部屋まで入って家族全員に祓いをした。だが、現在では部屋のことを壊す恐れがあるという心配があり、祭礼の巡行を家の中に入らせない氏子もいる。さらに、1970年代に生麦住宅団地が建てられ、マンションに「蛇」が入るのは困難になり、住宅団地への巡行が止められた。

また、「蛇」の製作の過程については、「蛇」の舌を作るための菖蒲が本来疫病退散の機能も持っていると思なされる植物なので、毎年必ず菖蒲を使って「蛇」の舌を作っていた。しかし、近年菖蒲の入手が困難になり店で買うと値段が高いため、これから菖蒲の代わりに茅で舌を作るという提案が保存会から出した。さらに、神事の供養物にも変化があった。かつて神事の供養物は生の鯛を主としていたが、現在では、果物と野菜だけになった。その原因を追究すると、かつて祭りには漁師の参加が中心であったため、生の鯛が簡単に手に入れるものである。だが、漁師がいなくなった現在では、保存会が協議した結果、より簡単に手に入れる果物と野菜を供養物にすることとした。地域の生産活動の変化に伴って供養物も変化するというのは、よく見られる祭祀の変化の1つである。生産や収穫量が減少するとともに、供養物に変化したりあるいは消失したりするのはよく存在する。また人々の意識も、供養物が神様に捧げる神物から、ただの神事の一環であるという意識に変化したのである。

以上のように、現在に至るまでの祭礼が行われる時間、場所、道具、材料などの点から見ると、「蛇も蚊も祭り」は構造的な面が少しずつ変化していった。これらの変化は祭祀行事が現代社会に適応するために生じた変化だと考える。

(3) 疫病退散要素の変化

「蛇も蚊も祭り」はそもそも疫病を退散するために行われる祭りであったが、現在、この祭りにおける疫病退散の要素はどのぐらい残されているだろうか。以下で分析してみたい。

「蛇も蚊も祭り」の中で最も重要な要素である「蛇」を作製する過程から見ると、いくつかの変化があった。まず、「蛇」の舌の製作は、いままで菖蒲で編んで作っていたが、近年菖蒲を手に入れることが難しくなったため、「蛇」の胴体と同じ材料の茅で作る傾向が見られる。菖蒲は魔よけの効果があるという説は昔から東アジアの広い範囲に分布しており、疫病退散祭礼ではよく使われる。中国では旧暦の5月5日の端午の節句を行う時に、疫病をもたらす邪気を家に入れないようにするために菖蒲を家門につける習慣が今でも残されている。また、韓国では端午の節句の日に、邪気を避けるためにお湯で菖蒲を煮てその菖蒲湯で髪の毛を洗ったり、菖蒲湯を飲んだりする習慣がある。このように、菖蒲は東アジアの範囲でも疫病退散祭礼に重要な要素と見なされている。しかし、「蛇も蚊も祭り」の場合、伝承者たちにとっては、菖蒲で「蛇」の舌を作ることがすでに重荷になっている。祭りのある一部の要素を変えざるを得ないことは、祭礼を伝承する過程の中で必ず出てくる問題である。一部の要素を捨てることで、全体の祭礼を順調に行えるようにすることは、1つの側面から見ると祭礼の伝統を犠牲にする部分がある。その反面、祭礼を継続させるための1つの方法ともいえるのではないだろうか。

また、「蛇も蚊も祭り」で「蛇」を担いで町内で巡行する際に一番注意しなければならない原則は、「蛇」をバックさせないようにすることである。しかし、町内の人口の増加に従って、町内の住宅は増々密集するようになり、道路も以前より細くなった。そのため、「蛇」を担いで巡行するチームは一軒回った後にはやむを得ずバックしてほかの住宅を回ることになる。このように、巡行する方法の変化は疫病退散要素の1つの変化と見ることができる。そもそも「蛇も蚊も祭り」で「蛇」を各家に巡行させることが、家々の邪気・疫病を吸収して、疫病を退散させることになる。そのために、すでに1つの住宅の邪気・疫病を吸収した「蛇」が必ず前に進んでほかの家へ巡行することは一番重要な原則である。もしすでに邪気・疫病を吸収した「蛇」をバックさせるとすると、またその家の邪気・疫病を元に戻すことになる恐れがあるからである。

現在の「蛇も蚊も祭り」は「蛇」を巡行する際に、何回も「蛇」をバックして巡行し続ける。この点から見ると、疫病退散の願望は弱くなっていることが明確に分かる。少なくとも参加者にとっては、「蛇も蚊も祭り」がすでに単なる疫病退散祭礼ではなく、以前のように疫病退散の要素を厳しく守る意味もなくなったものとする。客観的な側面では、現実的に環境面での制限があり、さらに、参加者の生活に密接な関連がなくなるにつれて、疫病退散の要素を守る意識も薄くなり、結果として祭りの中で、疫病退散という部分の要素がなくなり、全体的に祭りの形式が変わることになった。

次に、「蛇も蚊も祭り」における「蛇」の処理について、昭和30年代以前は船に乗せて東京湾まで運んで海に流していた。しかし、東京湾を通行する船のスクリューによく絡まるといことがあって、昭和30年代以降は神社で「蛇」を燃やすことになった。このように、祭りの最後に「蛇も蚊も祭り」の重要な要素である「蛇」を処理する方法の

変化を見ると、一見、疫病退散の要素の認識が薄くなっているとも考えられるが、日本以外のアジアの国の疫病退散儀礼の例を見ると、そうではないことが分かる。

疫病の象徴物を海あるいは川に流すことは疫病退散祭礼の中でよく見られるパターンである。中国の江南地域では、今でも「送瘟神」という祭祀行事においては、紙で作った船に疫病をもたらす悪をいっぱい乗せ、それを川を中心まで持っていき、そこで船を流す習慣が残されている（黄強 1993）。また、台湾でも「送王爺」という祭礼があり、疫病をもたらす悪気を船に乗せて流し、疫病退散の目的を達成する（周 1993）。さらに、韓国でも疫病を乗せる船を川に流し、疫病退散の目的を達する祭礼は現在でも行われている。このように、東アジアの範囲で疫病あるいはそれをもたらす悪や邪気を船に乗せて流すという行事が各地域で行われている。しかし、疫病退散祭礼の形式は疫病あるいはそれをもたらす悪や邪気を船に乗せて流すという形式だけではなく、それを祭祀儀礼の祭儀に燃やす地域もある。例えば、中国の江南地域では祭祀儀礼の最後に、疫病や邪気を乗せている船を燃やすことがある（周 1993）。

「蛇も蚊も祭り」は祭りの最後に疫病の象徴である「蛇」を海に流していたものを神社で燃やすということに変化した。これは町内会が相談した上で祭りの内容を変えた顕著な例だと見えるが、日本以外の国の疫病退散祭礼を見ると、疫病を象徴する物を処理する形式は海や川に流すこととそれを燃やすことの2つのパターンが存在していて、どちらパターンも東アジアの範囲ではよく見られる形式であることが分かった。「蛇も蚊も祭り」の「蛇」を処理する方法の変化は、疫病退散祭礼を存続させる上で発生したことであり、疫病退散祭礼としての特徴がまだ残されていると見ることができるだろう。

第5節 現在の「蛇も蚊も祭り」の「目に見えない」変化

以上に述べたように、地域社会の発展により「蛇も蚊も祭り」には多くの「目に見える」変化があった。では、「目に見える」変化の裏側にある「目に見えない」変化はどうだろう。元々地域の疫病退散を願うために行われる祭祀行事であったが、現在の伝承者は何の目的で「蛇も蚊も祭り」を続けて行っているか。また、どのような気持ちを持って「蛇も蚊も祭り」に参加しているか。次に祭りを担う現場の氏子に対する聞き取り調査を通して問題を解決する。

(1) 「生麦蛇も蚊も保存会」会長青木氏への聞き取り調査

青木氏は昭和8(1933)年一家の長男として横浜市生麦に生まれた。1957年に結婚し、その後も生麦に住んでおり、電気工事の監督の仕事をして30年以上していた。1993年に定年退職してから、地域の活動に熱心に参加するようになった。父親は生麦町内会の役員であったため、「蛇も蚊も祭り」に30年以上も参加していた。青木氏は、子供の時に父親が祭りに熱心に参加することを理解できなかった。何の意味も見当らず、「そんなことするのが馬鹿みたい」と語った。しかし、父親が亡くなってから青木氏は父親の代わり

に町内会の役員を担当し、さらに平成9(1997)年に「本宮蛇も蚊も保存会」の会長を担当し始めた。自分が祭りの組織者になってから、「蛇も蚊も祭り」のことをもう一度真剣に考え直したという。子供の時に、毎年父親が「蛇も蚊も祭り」に参加する姿を見て馬鹿げたことだと思っていた青木氏は、子供の時からずっと父親に祭りのことを教えてもらっていた。そのため、いつの間にか自分も「蛇も蚊も祭り」を行うと疫病が来なくなるという認識を持つようになった。町内会の役員を担当してからは、祭りに対する認識がより一層強くなってきた。

現在では、青木氏は毎年4月からすでに祭りのために多くの準備を始め、「蛇」の舌を作るための菖蒲が足りないため、自宅で菖蒲を植えている。筆者が青木氏のお宅へ聞き取り調査をしに行った時まだ「蛇も蚊も祭り」の本番の1ヶ月前であったが、青木氏はすでにあちこちへ祭りで使える茅を探しに行っていた。「電車に乗る時も、窓の外を見て使える茅を探しているよ」と青木氏は笑いながら語ってくれた。そのような姿に、筆者の心は打たれた。祭りがすでに青木氏の日常生活の一部になっていると強く感じさせる。

「蛇も蚊も祭り」当日は神社の前に屋台は1つもない。筆者は「なぜ祭りの時に屋台と出前の店を呼ばないのか。そうすれば祭りを見に来る人が増えるし、祭り自体もさらににぎやかになるのではないかと」と青木氏に尋ると、「蛇も蚊もはこの地区の祭り。他の人が来なくてもいい。「蛇も蚊も」は見せるもんじゃない。見せるものとして扱ってはいけない。あくまでもわれわれにとっては、疫病退散するための地域の行事だから」とまじめな顔で答えてくれた。青木氏にとって「蛇も蚊も祭り」は「見せる」祭礼でも「見られている」祭礼でもなく、単に地域の人々の日常生活の折り目であり、自分たちがその祭礼を継承する義務があると考えている。また、外部からの視線が祭りの有り様に決定的な影響を与えてほしくないという意識も強く持っている。伝承者は「蛇も蚊も祭り」を行うことを通して、地域氏子のアイデンティティを確認する役割を果たしている。

俵木悟は現代祭りの伝承について、「祭りが観光や町おこしの資源として利用されやすいのも、「見る／見られる」という関係性が前提となって、本来その祭りを担うはずではない多くの者を惹きつけ、資本主義の社会の中である種の商品価値を帯びるからにはほかならない」（俵木 2009）と述べ、現代社会における祭りの変遷の方向にい及している。しかし、筆者が調査した「蛇も蚊も祭り」は青木氏のように地域の民俗文化として守っている人がいるので、「商品価値を帯びる」商品になる可能性が低いと考えられる。住民たちにとって「蛇も蚊も祭り」は見せるものではなく、ただ地域内部の人が行う伝統行事で、商品や売り物になってはいけないものである。また、青木氏に今でも「蛇も蚊も祭り」を行わないと疫病が来ると信じているのかと聞くと、「信じるよ、なので必ず毎年やる。やらないと疫病が来るよ。お国、中国、最近インフルエンザが流行っているでしょう。それは、もしかしたら「蛇も蚊も」のような疫病退散儀礼をやらなきゃならないかなあ」と語ってくれた。

青木氏の話から氏子が持つ祭祀儀礼に対する素朴な信仰心が感じられた。青木氏と同

じように、祭りに対する素朴な信仰心を持っている氏子はまたいると思う。これらの氏子にとっては、地域の祭祀行事に参加することは日常生活の重要な1部分である。現代社会において祭りが多くの変化が生じて、祭りの神は地域の人々を守っていると彼らは信じている。

(2) 「生麦本宮蛇も蚊も保存会」会長石川氏への聞き取り調査

石川氏は「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の会長であり、現在石川建設会社の会長を務めている。横浜市生麦で生まれ、父親は石川県、母親は横浜市の出身である。父親は1970年代に生麦町内会の役員を担当していた。父親が町内会から辞めてから、石川氏は1975年に生麦町内会の役員に選ばれて、現在の生麦連合町内会の会長である。石川氏は自分が最初に町内会の役員として「蛇も蚊も祭り」に参加し始めたころのことを思い出し、「当時は会社の仕事があるから、祭りに参加しても現在のように一生懸命やっていなかった」と語った。子供の時から「蛇も蚊も祭り」に参加していたので、祭りの歴史を経験した人ともいえる。子供時代に「蛇も蚊も祭り」に参加する場面を思い出し、当時の祭りはまだ平日に行われていたが、生麦の小学校が祭りのために1日学校の授業をすべて止めて、小学生を祭りに参加させたという。しかし、だんだん小学校が祭りのために学校を休むことを許されなくなったので、小学生が祭りに参加できなくなった。その後、祭りが元々の平日から週末に変わってきた。また、現在の祭りの掛け声が「蛇も蚊も出たけい、日よりの雨けい、出たけい、出たけい」であるが、当時では新しい所帯を持っているうちに行くときに「〇〇氏の嫁けい、よ〜めけい、よめけい」との掛け声を唱えていた。また、当時「蛇」を担いで巡行する際に土足で氏子の家の土間に入って祓いをしていたが、現在土間を持っている家が一軒もないので、土足で「蛇」を民家の部屋まで入れなくなった。その後に1回だけ川崎市にある日本民家園から「蛇も蚊も祭り」を行う要請を受けて、日本民家園で展示されている伝統の家屋で「蛇も蚊も祭り」をやっていた時に、「蛇」を担いで土足で土間に入って祓いをした。

また、「蛇も蚊も祭り」を行う現代の意義に対して、石川氏は祭りの組織機関の担当者の視点から自分の考えを語ってくれた。「町に伝わる古い伝統的なことなら、それを大事にしようと。それは町に住んで、特に長く住んでいる人たちの、心の中に残っているはずだ。そういうものが。だから、そういうもので話しかけたり、そういうものでいろいろと行動することが、一番しやすいと、新しい何かを作って、こうしよう、ああしようというよりも、お祭がある、「蛇も蚊も」がある、みんなでやろう、「蛇も蚊も」をいったほうが早く伝わる、受け入れてくれる、というふうに思ったんですよ。だから、できるだけ町に伝わる古い行事、伝わる、われわれにね、ということをやろうと、だから、「蛇も蚊も」があって、また8月にお盆がありますよ。そういうものが、古くからあったものですから、やろうよって、そこでいろんな行事あると、みなさん力を出していくわけですよ。そういうことによって絆を深めていこうというふうに考えている。だから、その一見、近代的と古いこととがあるけれども、そういう形で結び付けて、そういうものを土台に立って、やりたいなあ。そういう中で大事な、あるいはいい友達を、いい

隣人を作っていこうと、作れたらいいんじゃない」という。

また、祭りの伝承について、「若い人たちに伝えないといけない。ところで、今やっている年寄りも、お前がやらなくていいから、こいつがやれっていわれたら、寂しいよ、年寄りが、やっぱりやっていきたいよ、みんな」という。筆者が石川氏の子供が現在祭りに参加しているかどうかの質問とすると、「参加していない。おやじがやっているから、俺はやらないとかね、やっぱり親のやつをやってみると、ばかばかしいことだと思っているでしょう。俺は子供のころそう思ったんだから、なんか親父がばかばかしいことをしているのよ、いつも、と思ったんだから。おやじいい加減にしたらつつて。今度変わって、僕がやり始めた、おやじにいわれた、ああ、一生懸命ですねっていった」

「いい仲間に恵まれるということ、僕は人生に一番大事なことだと思う。いい友達ができることってさあ、人間にとって一番幸せのことじゃないかなあと思う。だから、1つは古いものを大事にしながら、よい隣人に恵まれたいというふうに思っているんですよ。だから、別に隣人を求めるわけじゃないけれども、そういうことをやるうちに、そういう場に当たられちゃうんですよ」と語ってくれた。

石川氏の話から、「蛇も蚊も祭り」に対する認識が祭りに参加し始めた時からすこしずつ変わってきたことが分かる。地域の祭祀行事に参加し始めた時から、自分がその地域の1員であるということを認識し始めた。また、青木氏からも、子供の時は「蛇も蚊も祭り」に参加することはばかばかしいことを思っていたが、実際に自分が祭りに参加し始めると地域へのアイデンティティが喚起されたとの話があった。

以上、「蛇も蚊も祭り」2つの保存会の会長への聞き取り調査から、伝承者は「蛇も蚊も祭り」に対する認識が変化した状況を見えた。「蛇も蚊も祭り」への信仰を持っている氏子はいまだにいる。一方、無病息災を祈願するために「蛇も蚊も祭り」に参加するわけではなく、祭りに参加することを通して地域のアイデンティティを確認することを求める氏子は、多くなってきた。

第6節 「蛇も蚊も祭り」とスサノオ神話との関わり

「生麦蛇も蚊も保存会」の内部に「蛇も蚊も」の由来という資料がある。その資料は「蛇も蚊も祭り」に対するいい伝えにより整理したものである。資料では「蛇も蚊も祭り」の由来について次のように述べている。「先人古老からの伝承によると、今から300年余前、そのころ部落に疫病が流行したが無医時代のために部落民は大変困り、そこで相談の結果氏神祭神スサノオに因み、大蛇によってこの疫病を退散させようと考えた」。また、保存会が祭りを紹介するために製作したパンフレットにも、同じ由来が書かれている。「蛇も蚊も祭り」に参加する氏子に祭りの由来について聞いたところ、

「スサノオがヤマタノオロチ退治する神話に由来するんだ」と全員口を揃えいった。また、「蛇も蚊も祭り」とスサノオ神話との結び付きはいつからあったのかについて、氏子は祭りが行われた最初からあったのであると教えてくれた。ここまで見ると、「蛇も

蛇も祭り」はその由来がスサノオ神話にあると確認できるが、道念稻荷神社「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の会長石川氏から違う答えが出てきた。

石川氏は「蛇も蚊も祭り」がスサノオ神話に由来することに対して、神話との関連が薄いとはっきり答えた。石川氏は「蛇も蚊も祭り」がやはり農耕社会から出てくる祭祀行事であり、蛇を信仰しているため蛇の形を取って祭りを行っていると考えている。また、「蛇も蚊も祭り」を行う意義について石川氏は以下のように述べた。蛇は畑の害虫を食うので、農村社会で蛇に強い信仰を持っている。また、蛇は脱皮するという機能を持っており、新しい命を生み出されると象徴する。「蛇も蚊も祭り」は地域の疫病を退散することを祈願すると同時に、子供たちが無事に成長できることも祈る行事であるため、新しい命の生み出しを求める行事といえる。このように、「生麦本宮蛇も蚊も保存会」会長石川氏によると、「蛇も蚊も祭り」は、元々スサノオ神話との関連は薄く、むしろ農耕社会での蛇信仰がその由来であるとしている。さらに、現在の資料で「蛇も蚊も祭り」がスサノオ神話に由来すると記載されていることに対し、石川氏はそれが近代に入って日本神話の正統性を強調するため、儀礼に神話の要素を入れたのではないかと述べた。

もちろん石川氏1人だけの考えであり「蛇も蚊も祭り」とスサノオ神話の関連を否定するだけの説得力はないと考える。だが、「蛇も蚊も祭り」がスサノオ神話に由来するという「定説」と異なるいい方が出てくことは、注目される意義があるのではないだろうか。

小括

神奈川県「蛇も蚊も祭り」は300年余りの歴史を持つ疫病退散儀礼であるが、現代においてそれを伝承する形や儀礼の内容は少しずつ変化してきた。1990年代前半には町内会を中心として祭りが運営されていたが、その後、保存会が祭りの祭祀組織となった。また、茅の利用と「蛇」の製作及び巡行の形式など祭りの構造の面には多くの変化が生じた。さらに、疫病退散の要素も次第になくなっていく。だが、祭祀組織が変わったといっても、組織に構成する氏子は変わっていない。また、疫病退散の要素は少なくなっているが、まだ完全に消えているとはいえない。「蛇も蚊も祭り」の「目に見える」変化に対する分析から見て、現代社会に適応するために祭りの構造は変化が生じたが、重要な要素として祭りを担当する氏子の構成と疫病退散の要素がいまだに残されている。つまり、一見に祭りが多くの「目に見える」変化が生じたが、疫病退散という祭りの重要な要素がなくしているわけではない。現代社会の「蛇も蚊も祭り」は今でも疫病退散の要素が入っており、疫病退散儀礼としての特徴を持っている。

一方、「目に見えない」変化について、1部分の伝承者はいまだに祭りに疫病退散という信仰を持っている。だが、これよりもっと多くの伝承者は「蛇も蚊も祭り」に参加することを通して、宗教的な願望を実現するためではなく、自分の地域アイデンティテ

ィを確認すると変化した。

このように、現代社会における「蛇も蚊も祭り」は地域の疫病退散儀礼であるとともに、伝承者が地域アイデンティティを確認する行事にもなっていると考ええる。そのほか、祖先から伝えられてきた地域の伝統的行事に対して、いくら社会が発達し外部の環境が変わったとしても、地域の民俗文化と信仰を継続して伝承しなければならないという考えが、地域の人々の中にある。かつて村範囲で重要な疫病退散の役割を果たしてきた疫病退散祭礼は、現代社会の環境の中で伝統的な要素を追求しながら、より現代社会に適応する姿で地域に伝承されているという特徴を持っている。それと同時に、地域アイデンティティを確立する際に重要な役割を持っていると考ええる。

注

- (1) 平成21年横浜市統計ポータルサイトのホームページにのせる「横浜統計書」「web版」のデータによるもの。
- (2) 平成21年横浜市統計ポータルサイトのホームページにのせる「横浜統計書」「web版」のデータによるもの。
- (3) 本章の中で述べた「茅」（萱）の表記は、神明神社が「萱」と表記しているが、道念稲荷神社が「茅」と表記している。本章では文章の統一のため、すべて「茅」と表記する。
- (4) 「蛇も蚊も祭り」の中で「ヤマタノオロチ」に見立てる物は神明神社と道念稲荷神社による呼び名が違っている。神明神社では「蛇も蚊も」と呼び、道念稲荷神社では「蛇」と呼ぶ。本章は2つの神社の祭りを記述する時に、それぞれの保存会の方の呼び方で表記する。
- (5) 氏子青木氏により聞き取り調査による。
- (6) 「道念稲荷神社蛇も蚊も保存会」のパンフレットによる。
- (7) 「生麦本宮蛇も蚊も保存会」の会長石川氏によると、道念稲荷神社の「蛇も蚊も祭り」における「蛇」の作り方の「あじろあみ」は、昔生麦に住んでいる漁師が漁網を作る作り方と同じである。
- (8) 本論に載せる写真は、特別な説明がない場合ではすべて筆者が撮影した写真である。

第2章 伝承者の視点から見る祭祀儀礼の「変化」 —三重県津市白塚地区「やぶねり」神事を事例として—

第1節 問題提起と本章の目的

地域社会が現代化・都市化が進むとともに、祭祀儀礼に「目に見える」構造的な変化と伝承者が儀礼に対する「目に見えない」認識の変化が生じた。従来、祭祀儀礼の変化に対する研究者の認識は、祭祀儀礼の歴史的蓄積と一貫性を重要視し、現代社会に対応した変化には批判的であった。では、祭祀儀礼を担う伝承者は現代社会における祭祀儀礼の変化に対し、研究者と同じような認識を持っているだろうか。

現在、現代社会の祭祀儀礼の研究は、儀礼の変化・変容とその原因を検討する研究が圧倒的に多い。研究者は祭祀儀礼の内容から組織まで多くの点に変化があることを述べ、またその変化の社会的・地域的な原因を分析することによって、儀礼の持続に対するアドバイスを提供する。これはあくまでも研究者が伝承者を上から見る視線である。実際に地域の祭祀儀礼を担う伝承者の眼差しで祭祀儀礼の変化に対する捉えかたへの考察は、まだ不十分だと考える。祭祀儀礼の主体である伝承者の立場から現代社会における祭祀儀礼の変化に対する捉えかたへの考察は、民俗学の範囲で地域の民間信仰研究に重要な示唆を与えると考える。

本章では筆者が三重県津市白塚地区の「やぶねり」神事で行った参与調査を通し、以上の問題を解決したい。

「やぶねり」神事は350年余りの歴史がある伝統的な儀礼である。この神事は「スサノオが八岐大蛇を退治する」神話に由来する疫病退散儀礼であるといわれる。神事が行われる三重県津市では、昭和30年代以後現代化・都市化の道へ歩んできた。津市の現代化・都市化とともに、「やぶねり」神事は祭祀組織から神事の構造まで多くの変化が生じている。本章は「やぶねり」神事を担う白塚地区の氏子への聞き取り調査を通して、氏子の現在の「やぶねり」神事の変化に対する捉えかたを明らかにしたい。

第2節 研究対象の背景

(1) 調査地の背景

本章の調査地である三重県津市白塚町の交通、行政、人口、生業に関する概要を見てみよう。

まず、交通についてである。三重県津市白塚町八雲神社へは JR・近鉄津駅から、白塚駅行きのバスで12分。バス停白塚小学校から徒歩1分で着く。或いは近鉄名古屋線高田本山駅から徒歩15分で着く⁽¹⁾。白塚八雲神社は十字路に位置している。

次に、行政についてである。三重県津市は明治4(1871)年廃藩置県となり、同5年3月に区制が定められ、津は安濃郡の第1区、第2区に属した。同年5月には県管下を10大

区に分け、その第8大区（安濃郡でその内を6小区に分けた）の第1、第2、第3小区に属した。さらに、明治22（1889）年4月1日に市制が実行され、津は安濃郡から分離して津市として独立した一自治体として雄々しく発足したのである。同時に津市の区域は橋北、橋内、橋南地区であった（津市役所 1965：273）。津市白塚町は昭和28（1953）年以前は津市の隣村であり、従来から交通、経済、その他の面において津市とは密接な関係にあったため、昭和28（1953）年9月「町村合併促進法」が公布され、白塚町の将来発展のため津市へ合併した。

次に、人口についてである。昭和36（1961）年に白塚の世帯数は1,136戸、人口5,310人であった⁽²⁾。平成18（2006）年の市町村合併により、津市白塚村は白塚町となった。また平成18（2006）年、白塚町の総世帯数は、3676戸で総人口9122人であり、その内男性人口が4478人、女性人口が4611人である⁽³⁾。これらの数字を見ると、昭和30年代以来、津市白塚町の人口は増加していることが分る。しかし、20世紀50年代の年齢階層別人口比率表を見ると、0歳から14歳の人口数は減っているが、65歳以上の人口数が大幅に増加していることが分る（表3-1）。昭和30年代から津市の人口は少子化と高齢化の状況が深刻化していることが分る。

（表 3-1） 津市戦後の年齢層別人口増減状況

年次	0歳～14歳		15歳～64歳		65歳～		計	
	人口	増加	人口	増加	人口	増加	人口	増加
1950年	31,1698		60,269		5,003		96,440	
1954年	30,801	-367	67,461	+7,192	5,797	+794	104,059	+7,619
1959年	27,833	-2,970	73,233	+5,772	6,916	+1,119	107,980	+3,921
増減数		-3,337		+12,964		+1,913		+11,540
同上%		-11%		+21%		+38%		+11%

最後に、生業についてである。昭和初期まで白塚地区の主な生業は漁業であり、地区には白塚魚市場と中央魚市場2つの漁業市場があった。その内、白塚市場は、昭和27（1952）年に創立され、株主125人仲買人180人、中央市場は同30年（1955）に創立され、株主は170人余り、資本金は60万円、仲買人は約150人である。両市場とも毎日午後5時開市し、年間売上は両市場とも4000～5000万円である。出荷先は名古屋市場、焼津、波切など志摩及び地元である。魚の種類は大物が少なく、行商に便利な軽いものが多い。白塚の特徴として仲買人は店舗売りではなく、夕方の市で買ったものを翌早朝から自転車で一志、安芸郡方面に、電車で伊賀方面、汽車で滋賀県、京都へと大体3方面に行商に出る。魚市場ができる数軒の個人の委託問屋があったが、その委託問屋は今は二軒現存している（津市役所 1965：484）。だが、昭和40年代以後、魚を加工する工場が増え、かつて漁師として稼いだ人は転職して加工工場働くようになった。これらの漁師に話を聞くと、昭

和 40 年代以後、白塚の漁師は高齢化の現象が厳しく、白塚以外の都市へ出稼ぎに行く、また加工工場で働く若者が増えてきた。さらに、白塚地区の漁の収穫量は昭和 40 年代に次第に減って行き、漁師の人数も次第に減っていった。

(2) 八雲神社と「やぶねり」神事の由来

「やぶねり」神事が行われる最初の記録は残念ながら残されていない。しかし、地元の人たちのいい伝えによると、「やぶねり」神事はすでに 350 年余りの歴史があるといわれる。その歴史ある神事のきっかけとなる資料を調べると、津において江戸時代に何度か疫病が大流行した。先ず承応 2 (1653) 年江戸の疫病は、みな急性の熱病症状であった。その発病者 400 余人中 20 人が死亡、ということから考えると、それほどに危険な病状であった (津市役所 1960)。また、貞享元 (1684) 年の疫病が長崎から伝わり、九州中国から畿内に入り、堺では死者千人に上ったとのことで、更に東に進んで伊勢、近江、美濃、尾張の各地に流行した。それ以外に「宗国史」元禄 4 (1691) 年の条に「冬十月封内の士民疫す、命して神明に譲らしめ霊符を二州将士の家に頒つ」とあり、宝永 3 (1706) 年・元文 5 (1740) 年にも疫病の記録がある (津市役所 1960)。以上の江戸初期に流行した疫病の記録を見ると、恐らく疫病退散儀礼としての「やぶねり」神事は、今から 400 年前の江戸初期に疫病が広い範囲に流行していたため、その後に神事が行われるようになったのではないかと推測することができる。

「やぶねり」神事が行われる神社である白塚八雲神社の主祭神は須佐之男命⁽⁴⁾ (スサノオ) であり、ほかに市杵島姫命、倉稻魂命、足名椎命、手名椎命、木花佐久耶姫命、猿田毘古命、大山津見命、大日靈貴命、伊耶那美命、事代主命、蛭子命、大国主命、大宮姫命、大田神、彦火出見命、金山彦命も祭神とされている。白塚八雲神社が今の地につくられた年代はよく分からないが、伝えられるところによると神社は古くは大梵天王と呼ばれ、また村は古里と呼ばれていた。ところがいつの時代か村に高波が襲い村人は舟で黒田村 (今の河芸町黒田) に避難した。潮が引いてから千王名という人が村に帰ってみると、高浪のために人家はことごとく流失して村の土地はただ白い砂に変わりはてていた。しかし、神社だけは小高いところにあって被害がなかったため、神社に参拝したあと黒田に戻ってその様子を語り、再び村人を元の地につれ帰ったといわれる。古い地震の記録によると、明応 7 (1489) 年に紀伊から房総半島にかけてマグニチュード 8.6 と思われる巨大地震が襲い、大津波も発生して海岸部に大被害を与えた。そのとき津の町や港も波にさらわれ、白塚海岸も高浪に襲われた。そのため、白塚の村が神社を中心に再建されたのは今から約 500 年前と考えられる⁽⁵⁾。それ故、村名は白砂の浜辺を意味する白州から白須賀、さらに変化して白塚に落ち着いたものと考えられる。

八雲神社の境内社は霞浦神社と菅原神社がある。いずれも明治時代末に神社合祀令によって旧白塚村内から現在の場所に移されたものである。菅原神社はよく知られているように学問の神としてあつく信仰されている菅原道真を祭っている。境内の両社殿はいずれも建てたところから長い年月を経て傷みもひどくなったため、白塚町内をはじめ神社とつながり深い 1400 名の人々の寄付により平成 15 (2003) 年から 16 (2004) 年にかけて改築された。工事の際元の霞浦神社本殿の天井から慶応 4 (1868) 年建立との棟札が出てきたこと